唐末の密教と蘇悉地

三　崎　良　周

一

圓仁によつて將來され、圓珍安然以下、台密の諸匠により形成されて來た蘇悉地法は、その發祥の母胎である唐末においては、一體どのようなものであつたか。蘇悉地が胎金の二部に竝んで大法とされたのは、寓目し得る記錄では、海雲の血脈が早いようで、圓仁もその巡禮行記において、法全から蘇悉地大法を受けた、と記している。一方、圓珍の頃から、蘇悉地の供養作法が十八道とされて來たらしく、安然の敎時問答卷四には、それが明瞭にあらわれている。そして現今では一般に、「蘇悉地とは十八道なり。」というに至つているが、しかし十八道は、東密でも空海により傳承されているのであるから、台密の十八道について唐末からの傳承やその內容を檢討し、東密のそれと辨別しなければ、蘇悉地としての十八道の意義は認められないであろう。また蘇悉地が胎金兩部に竝ぶ大法ということになれば、當然そこに阿闍梨灌頂の印信が考えられなければならず、それ故にわたくしは、この台密の蘇悉地を解明する上に、一應の便宜的な方法として、蘇悉地灌頂における根本印信と、蘇悉地供養法としての十八道とに問題を分けて考說を試みたのである。

しかしそこに殘された問題は、供養法と根本印信との關係、また胎金兩部との關係について、特に唐末の部面に對する究明、ということである。ただここで注意を要することは、台密の蘇悉地は圓仁によつて傳承されたのであるから、當然に唐末において蘇悉地法が行われていたと想像されるのであるが、台密の蘇悉地は單にその延長であるかどうかであり、このことは個々の部面において嚴密に辯別しておく必要があろう。また小稿においては、紙數の關係で、供養法の問題はしばらく措いて、蘇悉地灌頂における根本印信をめぐつての問題にとどめたい、と思う。

二

蘇悉地の根本印信について、先ず問題とされるのは三種悉地である。この三種悉地を最も詳細に説くのは、三種悉地破地獄儀軌の三本であり、その譯者はいずれも善無畏とされるのであるが、實は更に時代の降つたシナ撰述であるらしい。次に、上中下の成就という三種悉地思想を示す經軌としては、菩提流志譯の一字佛頂輪王經、五佛頂三昧陀羅尼經、善無畏譯の蘇悉地經、蘇婆呼經、不空譯の菩提場經、同撰の都部陀羅尼目、總釋陀羅尼讃、慧林の建立曼荼羅及揀擇地法、等があるが、これらの經軌には、いずれも眞言や印契が示されていないのである。そして蘇悉地經卷一に「若有下持二誦餘眞言法一、不中成就上者、當レ令レ兼二持此經根本眞言一、當二速成就一。」とあり、また「復次、上中下成就法者、如二別經說一。」とあつても、圓仁はその疏に「この經の根本眞言」や「別經」を示していない。そのためにこの問題について、後世いろいろの教說が構えられるのであり、安然は「別經」を毘盧遮那別行經であるとし、三昧流では「根本眞言」を別行經の心地根本神呪とするのである。一體に、眞言も印契も主尊も不明のままに、灌頂大法があり得るであろうか。

三

蘇悉地法の本質というべきものを一應想定してみるならば、それは蘇悉地の文字通り「諸法を完全に成就せしめる。」ということと、善無畏・金剛智の時代から完成したとされる胎金の兩部に相互つている、ということであろう。

このことについては、先に擧げた海雲血脈に、

次有二蘇悉地教一、廣明二三部一、亦攝二持念法一。此中、但明二事成就一。與二金剛界及大毘盧遮那一、義味相涉、亦是至極要妙法。三藏善無畏所譯、兼二前二部大教一、及二蘇悉地一、共成二三部大教一。

と、「金胎の兩部に義味相涉る。」「二教（金胎）と蘇悉地とで、三部大教を成ず。」とあることが權證とされるであろう。この記に關連しては、圓珍の決示三種悉地法に、次のようにあることが注意される。

青龍寺全阿闍梨、分二付圓珍雜眞言一云、多寶梵志、於二三十萬字毘盧遮那金剛頂經一、採二集要妙一、最上勝殊福田、唯五字眞言。全大和尙面決云、此（アバンランカンケン）法身眞言也。其二佛者、全身在二兩部諸經中一。……仁忠大阿闍梨隨身祕書中、別有二一本要妙一、云、五部卷帙貝多梵筴三十萬言、出二毘盧遮那金剛頂經一、採二集要妙一、最上福田、唯此五字眞言。誦者所レ獲功德、不レ可二比量一、不レ可レ說也。出入成就悉地、及化身報身眞言名義、具釋在レ彼、故今不レ載レ之。

ここにいうところは、「アバンランカンケンの五字眞言は、大日經・金剛頂經の要妙を採集したもの。」としている。これらのことを基準として、蘇悉地の考說は出發しなければならない。

それに併せて注意すべきは、「妙成就」、「一切成就」という語句は、大日經には處處に多く用いられ、金剛頂瑜伽中略出念誦經にも「最上悉地成就」、「悉地跋折羅」等の語句が屢〻見えているが、その他の密典にも多く「成就品」がおかれ、如何にして諸法が成就されるかを説いているのであつて、いわば密教には通じて、その修法の成就は最も願望されるところである。そこで氣づくことは、蘇悉地羯羅經とは、この「妙成就のための作業」を表題に掲げた經であることである。そしてその請問品に「此蘇悉地經、若持二餘眞言法一、不レ成就一者、能兼二持此經根本眞言一、當二速成就一。於二三部中一、此經爲レ王、亦能成二辨一切等事一。」とあるように、「他の眞言法を（すべて）成就せしめる」のがこの蘇悉地經であり、また「（他の眞言を持しつつ）この經の根本眞言を兼ね持す。」と、すべての他の眞言法を前に豫想しつつ、それらを完結せしめるのがこの眞言法である、というところに、蘇悉地經の主張があると見られる。このような表現は、他にはさらに降つた時代のシナ撰述と想われる毘盧遮那別行經では、三種悉地を前に置き、それが成就しなければ心地根本神呪を誦持すべきことを説くので、いわば蘇悉地經等の説に加上しているのであつて、別行經については、また別の問題が展開されるであろう。ここでは焦點を蘇悉地經において、佛蓮金の三部の成就を説くこの經が、たとえ胎藏界の攝であるとしても、唐末の胎金合糅を意圖する眞言家には、金剛界の修法をも含めて成就せしめる密典と見なされる可能性がある。

このことに關連して、大日經世間成就品義釋には、「若諸行者、欲レ作二世間上中下成就事一者、當レ參二用蘇悉地經等諸經一。」とあり、金剛頂略出經卷三には「其作壇處、或別作二淨室一、或舊淨室、擇地等法、不レ異二蘇悉地説一。」と、いずれも蘇悉地經を念頭に置いている。特に金剛頂經において胎藏部の蘇悉地經を指摘していることは、注目すべきである。

四

次に、三種悉地破地獄儀軌に三眞言が充當せられていることに關し、この儀軌の成立の一端緒を考えてみたい。そこにとり上げられるのは大日經義釋である。

義釋では、經の本文を變改して、蘇悉地經を援用しつつ、修法の場所、時間、目的、衆生の煩惱の種類等を三種に分けているのであるが、特に具緣品義釋に次のように記されていることは、注意すべきであろう。

經云、世間一切支分、皆悉出二現如來之身一者、前現二莊嚴藏一時、普門一一身、各遍二十方一、隨レ緣應レ物。今欲レ説二漫荼羅圖位一、故還約二佛身上中下體一、以二部類一分レ之。

すなわち持誦法則品には、下體、臍上、心、白毫、頂にアバンランカンケンの五字を布字しているし、また祕密漫荼羅

品に、「眞言者圓壇、先置二於自體一。自レ足而至レ臍、成二大金剛輪一。從レ此而至レ心、當レ思二惟水輪一。水輪上火輪、火輪上風輪。次應下念二持地一、而圖中衆形像上。」とあつて、ここにいわゆる五輪成身觀の出處があるわけである。ところが義釋では、右に示したように如來身を上中下に三分しているのである。それは上來述べた蘇悉地經の三分の例の一でもあり、また請問品の「從レ腋至レ頂爲レ上、從レ臍至レ腋爲レ中、從レ足至レ臍爲レ下。」にもとづくのであろう。

ところが破地獄儀軌では、この五輪成身觀を引用して、金剛界の五智、五如來、五大、また五方、五色、五臟に宛用している一方、義釋で五輪に宛てていたアバンランカンケンの五字を身體の上體、アビラウンケンを中體、アラハシャナを下體に配している。そこに胎金合糅の意圖を推測せしめるのではあるが、それはむしろ五輪成身觀をも、胎金の綱格をも崩すものといえよう。またアビラウンケンの五字はアバンランカンケンとともに、その母韻やヴィサルガととれたアヴァラカキャの五字が身體の五支分や五輪に宛てられるのであるが、破地獄儀軌で中品の眞言とされるようになつた理由は不明である。アラハシャナの五字は、圓珍の指示するように金剛頂瑜伽文殊五字品等に見えるが、これまた下品眞言とされた必然性は分らない。金剛界系統から五字眞言を索めるとすれば、むしろ略出經のバン ウン タラク キリク アクの方が、金わ剛界の五部、五如來を示すのであるからさらに適當と想れる。しかし義釋は、破地獄儀軌の形成に、多くの資料を提供したものと考えられるのである。

五

次に蘇悉地の主尊についてであるが、蘇悉地經では佛頂如來であるに對し、破地獄儀軌では尊勝佛頂である。蘇悉地經の佛頂如來は、恐らく菩提流志譯の一字佛頂輪王經、寶思惟譯の大陀羅尼末法中一字心呪經、阿地瞿多譯の陀羅尼集經の佛頂へと遡つて系統づけられるようである。またこれらの經典は、胎金未分の時代の編纂と考えられるのであり、それ故にこそ、後世から見て、胎金合糅的傾向も觀取できるようである。一方、十八道と密接な關連をもつ蘇悉地供養法の先蹤が陀羅尼集經であることも指摘されるのである。そして蘇悉地經に示す佛頂とは佛頂輪王であり、それをとりまく佛頂如來の中に、尊勝佛頂の名は見られない。破地獄儀軌の尊勝佛頂は、杜行顗、佛陀波利譯の尊勝儀軌に由來し、不空の時代以降、上下に信奉された影響かと想われる。そして破地獄儀軌の成立は、顯戒論緣起卷上に最澄が三種悉地印信を相承されたとあり、空海の三十帖策子に「破地獄眞言」があることからして、惠果の時代であろうか、と推測するものである。

（註）近刊の密教學密教史論文集（高野山刊）收載の拙稿を參照。